

# 北朝鮮ミサイルの脅威が一段と拡大

拓殖大学海外事情研究所教授

名越 健郎



Kenro Nagoshi

北朝鮮が新型ミサイルの発射実験を繰り返して、技術力を強化したことで、日本の安全保障への脅威が高まっている。とりわけ、低空で不規則な軌道を飛ぶ新型の短距離ミサイルは、ロシア製の「イスカンデルM」型に似ており、ミサイル防衛(MD)システムによる迎撃が難しい。トランプ米大統領が北朝鮮の短距離ミサイルについて、開発・発射を容認する姿勢を示していることも気掛かりだ。

## ロシア製ミサイルに酷似

北朝鮮は2、3年前、毎週のように日本海に向けてミサイルを発射していたが、2017年10月、大陸間弾道ミサイル(ICBM)を発射し、「核計画」の完成を発表した後、発射を避けていた。その後、南北首脳会談やシンガポールでの米朝首脳会談があり、緊張緩和が進むかにもえた。しかし、北朝鮮は今年5月、約一年半ぶりに発射を再開し、10月までに計11回発射した。2月にハノイで開かれた2度目の米朝首脳会談が成果を上げなかったことから、再び緊張を高める瀬戸際戦術に出たかにも見える。

このうち、4回発射された短距離ミサイルは、飛行経路が従来と異なる新型ミサイルだった。このミサイルは低い軌道で発射され、高度50km以下の大気圏内を飛び、最後に急上昇して突然、急角度で落下するなど変則的に飛行した。これが配備されると対処するのが難しい。米国の軍事専門家は、野球の投球で不規則に変化する「ナックルボール」と形容した。

この飛行経路はロシア製短距離ミサイルの「イスカンデルM」に酷似しており、発射装置や格納装置も似ているという。ロシア製イスカンデルは、捕捉の難しいミサイルとして1970年代末のソ連時代から開発が始まり、曲折を経て2005年ごろ完成。11年からロシア軍主要部隊への配備が始まった。通常弾頭のほか、核弾頭の搭載が可能で、射程距離は推定約500km。複雑な軌道変更を行い、迎撃ミサイルを回避する能力を有するとされるが、現在配備中の秘密兵器だけに、詳しい実態はつかめない。

## ウクライナ人技術者が協力か

北朝鮮がどこからこの技術を手に入れたかは謎だ。ロシアは国連安保理常任理事国として、北朝鮮への兵器輸出を禁止した国連制裁を順守しており、公式ルートで売却することはあり得ない。リオットは各地に配備されているものの、心もとないようだ。日本政府が山口県と秋田県に導入を計画している陸上配備型迎撃ミサイル「イージス・アショア」でも、対応が難しいとみられる。

北朝鮮は10月初め、新型の潜水艦発射弾道ミサイル(SLBM)の発射に成功したと発表した。潜水艦に配備するならば、発射地点の特定が困難になる。このミサイルも通常より高角度の「ロフテッド軌道」で発射され、垂直に近い軌道で落下するたため、迎撃が難しい。

北朝鮮はミサイルに搭載する核兵器の小型化も進めているもよう。9月に日本政府が公表した防衛白書は、北朝鮮が核弾頭の小型化を「既に実現しているとみられる」と初めて断定した。北朝鮮は、日本への核攻撃能力を着々と備えていることになる。

深刻なのはトランプ米大統領の姿勢だ。大統領は8月「北朝鮮が発射した短距離ミサイルは問題ない。よくあることだ」と容認した。長距離ミサイル以外なら問題視しない立場で、短距離も国連安保理決議違反とみなす日本との間で亀裂が生じた。

米朝間では10月にミサイル協議が行われたが、進展はなかった。対北強硬派のボルトン大統領補佐官(国家安全保障担当)が辞任した後、米政府に北朝鮮への融和姿勢がみられる。トランプ大統領と親交の深い安倍晋三首相は、北朝鮮のミサイルの脅威を大統領に説明し、韓国も含めた日米韓の連携強化を図るべきだろう。

問題は、日本の保有するミサイル防衛システムでは、この新型短距離ミサイルへの対応が難しいことだ。日本が持つミサイル防衛システムは、①イージス艦に搭載される迎撃ミサイル「SM3」②地上配備の地对空ミサイル「パトリオット」の二つがあるが、SM3は大気圏外でしか使えないため、イスカデル型には役に立たない。低空で迎撃するパト

## ミサイル防衛で捕捉困難

問題は、日本の保有するミサイル防衛システムでは、この新型短距離ミサイルへの対応が難しいことだ。

日本が持つミサイル防衛システムは、①イージス艦に搭載される迎撃ミサイル「SM3」②地上配備の地对空ミサイル「パトリオット」の二つがあるが、SM3は大気圏外でしか使えないため、イスカデル型には役に立たない。低空で迎撃するパト

M O V E M E N T